

チェルノブイリの子どもたち



チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 120 2021 年 10 月 29 日発行

2021 年夏 子どもたちの保養・家族の保養



ベラルーシ 子どもたちの保養

ウクライナ 子どもたちの保養



ベラルーシ 家族の保養



“2022 年チェルノブイリ救援カレンダー” 完成しました お申込み受付中！

詳細は同封のチラシと本号 14 頁をご覧ください

~~~~~ 本号の目次 ~~~

p.2~6 子どもたちの夏の保養

p.7~9 家族の保養

p.10 里親のページ

p.11 福島県甲状腺がん検査縮小の動き

p.12 うたごえ

p.13 黒部ドクターのお話

p.14 カレンダー、ほか販売品のご案内

p.15 募金・救援状況

p.16 事務局から

## 放射能汚染地域に住む病気の子どもたちのための特別保養

2021 年 夏 ウクライナ・ベラルーシ

両国とも、新型コロナウイルス感染の影響が続いているため、子どもたちの健康を第一に考えて準備を整え、細心の注意を払いながら子どもたちを受け入れ、無事に終了することができました。参加した子どもたちの声を聴くと、この保養を今年も実施できたことは本当によかったと感じます。

### ウクライナの子どもの保養

■場所：ヘルソン州ゴーラヤ・プリスタニ地区  
子ども保養施設「ドルフィン」

■期間：2021 年 8 月 6 日～8 月 16 日（11 日間）

■参加者：子ども 37 人（6～14 歳／ジトーミル州  
ナロジチ地区・オヴルチ地区、キエフ市）、引率  
者 4 人（医師 1 人、教師 2 人、保養指導員 1 人）

■参加者の病名：胆道運動異常症、心臓の病気、  
気管支炎、慢性膀胱炎、慢性腎盂腎炎、扁桃腺炎。

出発 3 日前、子どもたちの検診を兼ねた保護者説明会が実施されました。この時点で参加リストに載る子どもたちは全員参加に問題のない健康状態であることが確認されました。ところが出発の 1 日前になって 3 人の子どもたちの健康状態に問題が生じたため、至急交代させなければならなくなりました。このような事態は事前に想定していたので、補欠とされていた子どもたちを参加者リストに加えることになりました。

バスでオヴルチとナロジチを早朝 5 時に出発し、キエフまでの道中（200km）、子どもたちは車内でほぼ寝て過ごしていました。朝 9 時、大型バスに乗り換え、19 時頃目的地である黒海沿岸の保養地ジェレズヌィ・ポルトに到着しました。この距離は 600km ありましたが、子どもたちはバスの中で快適に過ごし、移動は楽でした。

19 時頃に保養所に着くと、保養所の世話係の皆さんがバスまで私たちを迎えに来てくれました。保養所では子どもたちに専属の世話係や指導員が付き、さらに子どもたち専用のビーチにも専属の水泳指導員が付きました。

保養の実施にあたっては医師たちと話し合い、チェルノブイリ被災地域の子どもたちにとって、砂浜や海の中で行う様々な遊びや競技を通じた保養の取組みが健康強化にとりわけ有益であるとの認識で一致しました。ジェレズヌィ・ポルトの海岸は、そのビーチが浜の部分も海の中の部分もブイなどで他と区切られており、そうしたことを行うのに適していました。





起床、朝の体操、朝食後に海辺で過ごしました。その後昼食までの時間には、引率者として同行したインナさんが開いた作品作りの教室に、子どもたちは楽しく参加しました。また、子どもたちは指導員と一緒に夜に行われる催しに向けた、様々な創作や、ダンス、歌のコンクールの準備を行いました。食堂での食事は、十分に栄養のバランスの取れたもので、野菜や果物、お粥など、文句なしのものでした。その後はさらに、海へ行ったり、様々な催し物に参加したり、ディスコ・ダンスの催しに参加するなどしてスケジュールを過ごしました。毎日 22:30 に全員参加の集まりを必ず開き、ここで 1 日を振り返る反省会を行うようにしました。この場で 1 日の間の良かったこと、悪かったことを話し合い、結論をまとめました。子どもたちも大人たちも自分の感じたことや考えを皆に話し、こうしたこと全体を通じて、私たちの大所帯のグループが短期間できちんとした保養生活を送れるようになりました。こうして盛り沢山、様々なことを経験した 1 日を終えて、子どもたちはいつもあつという間に眠りにつきました。

今回の保養センターでの子どもたちの保養にあたっては、新型コロナウイルス対策の観点からは、次のような点が留意されました：

1. 保養所の敷地が直接海に面していること。
2. すべての出入り口が警備によって管理されていること。
3. 子ども用ビーチに外部の人間が立ち入らないこと。
4. 各種催し物は、個別に用意された室内で実施す

ること。全ての行事について、子どもたちが部外者と接することのないような形で準備すること。

また、今回の保養にはタチヤナ・K 医師が同行し、参加した子どもたち全員の健康状態について常に管理しました。

保養グループ責任者 ニコライ・K

~~~~~

チェルノブイリ子ども基金と募金者のみなさま、このような大きなご支援をくださり、心よりお礼を申し上げます。このような保養は子どもたちにとって本当に大切なことでした。子どもたちはいろいろな催し物に参加し、新しい体験をして楽しみました。海洋公園への遠足もありました。来年もこのような保養に招待してくださることを願っています。本当にありがとうございました。

引率者 インナ・S

~~~~~

### <子どもたちの感想>

★マリヤ（12 歳・ナロジチ市）

初めて海に来ました。私たちが過ごしたところは快適でよいところでした。食事は量も多くて美味しかったです。私たちは毎日海に行き、浜辺では面白い遊びをしました。日本のみなさん、ありがとうございます。

★アナスタシヤ（14 歳・ナロジチ地区）

保養はとても楽しかったです。グループはみんな仲良しでした。美味しい食事に大満足でした。私たちは毎日 2 回海に行きました。海に行ける機会をもらえてうれしく思います。だって私の住んでいるところから海はとても遠いのです。



★ナザール（12歳・ヴィシゴロド市）

この保養に来ることができてとてもうれしかったです。僕は新しい友だちができました。海で泳ぎ、面白いコンクールなどに参加しました。この保養を忘れることはありません。ありがとうございます！

★ヴェロニカ（14歳・ナロジチ地区）

生まれて初めて海に来ました。毎朝海辺に行き、夜はディスコで踊り、いろいろな催し物と食事もよかったです。みなさんにとても感謝しています。もし実際に会うことができれば、私はもっとたくさん感謝の気持ちを表すでしょう！

★マリアンナ（13歳・キエフ市）

私たちの保養のために寄付金を集めてくださったチェルノブイリ子ども基金にとっても感謝します。みなさんは私たちに喜びと希望をくださいました。私たちが保養をしたところは、まるで絵本の中に描かれているような、外の世界とは全く違うものでした。そこで私は素晴らしい友人たち、そして私たちの世話をし楽しませてくれた、素晴らしい大人たちに囲まれて過ごしました。みなさんのご支援をありがとうございます。



## ベラルーシの子どもの保養

- 場所：子どもリハビリ・健康回復センター  
「ナデジダ（希望）」 ミンスク州ビレイカ地区
- 期間：2021年8月3日～8月26日（24日間）
- 参加者：子ども32人（8～16歳／ゴメリ市、レチツァ市、ドーブルシ市、カリニコヴィチ地区、ゴメリ地区、ホイニキ地区、ブラーギン地区）、引率者2人（教師1人、看護師1人）
- 参加者の病名：腎臓がん、肝臓がん、目の腫瘍、後腹膜神経芽細胞腫、精巣がん、リンパ管腫、線維肉腫、ユーイング肉腫、甲状腺ガン、出血性脈管炎、血小板減少症。

（以上の病気とともに、心臓の異常、甲状腺炎、脊柱側弯症、慢性胃炎、慢性扁桃腺炎を患う子どももいる。）

ナデジダでのプロジェクトの実施に関し、私たちを信頼し、協力を続けてくださったことに心から感謝いたします。

昨年に続き、今年もCOVID-19ウイルス感染により、プロジェクトの準備と参加者の選択は大変困難でした。しかし、日本のチェルノブイリ子ども基金、ベラルーシの慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」と私たち「ナデジダ」は、お互い信頼できるパートナーとして、共に問題について話し合い、交流を続けました。そのおかげで、さまざまな困難や問題にもかかわらず、プロジェクトは実施され、良い結果を得ることができました。両団体のみなさまに心からお礼を申し上げたいと思います。毎年ナデジダを訪れていた子ども基金のマリさんと、今年もナデジダで直接お会いすることができませんでしたが、ナデジダ職員、保養参加者たちとオンラインで交流をすることができました。

プロジェクト参加者たちのオープンで前向きな姿勢は大変よい雰囲気を作り上げ、それは健康を強化するだけでなく、気持ちを強く、しなやかにし、リラックスすることにも大いに役立ちました。参加者たちにも感謝します。

保養受け入れ担当  
ガリーナ・P



グループの子どもたちは8～16歳という年齢差に関わらず、大変仲が良く、楽しく快適に過ごしました。年長の子どもたちは、先生や引率者の手伝いをし、年少の子どもたちの面倒をよくみました。数年前まではやんちゃ坊主だったある男の子は、今は小さい子どもたちのよいお兄さんになっています。

子どもたちはそれぞれの体調に応じた医療サービス（マッサージ、療養体操、アロマテラピー等）を受け、クラブ活動（陶芸、木工細工、手芸、折り紙等）や催し物（コンサート、演劇、スポーツ大会等）に参加しながら日々を過ごしました。自由時間には敷地内の遊具で遊んだり、林の中を散歩したり、人造湖へピクニックに行ったりしました。

保養最終日に実施したアンケートでは、全員が「ナデジダの保養は良かった」と答えました。理由として、「新しい友だちができたから。食事が美味しかったから。休養するのによい場所だったから。良い治療を受けたから。気分がよくなったから。ディスコが楽しかったから。自然がきれいだから。楽しかったから。友達がいるから。好きな場所だから。休養に良い場所だから。来るたびに楽しさが増すから。みんな仲が良くって雰囲気が良いから。保養に来るなら絶対ナデジダがいい。私たちのグループ担当の先生たちは、いつも何か問題があると解決してくれた」などが挙げられました。また、「体の調子や気分はよくなりましたか？」という質問には、30人が「よくなった」と答えました。具体的には、「マッサージを受けたのがよかった。いろいろな良い治療を受けた。家

にいる時より気分がよい。よく眠れるようになった。食欲が増した」などが挙げられました。

多くの子どもたちが、「クラブ活動に参加し新しいことを学んだり、作品を作ったりしたことが楽しかった」、また「舞台上で演じたり歌ったことで自信がついた」と答えています。

「ナデジダで得た健康的な生活の知識を今後も実行し続けますか？」の問いには、全員が「はい」と答えています。具体的には、「正しい食事をします。手を洗います。規則正しい生活をします。体操をします。今までよりスポーツをします。快眠を目指します。」などと答えています。

そして、「誰が一番、あなたの健康に注意すべきだと思いますか？」の問いには、<a. 両親-6人 b. 友人-1人 c. 先生-0人 d. 医師や看護師-4人 e. 自分-30人> と答えました。何人かの子どもは、2つの項目に印をつけました。

保養の最終日にグループで行ったミーティングで、子どもたちは日本のみなさんへの感謝の言葉を口にしました。このグループを担当した私たちからもお礼を申し上げます。チェルノブイリの問題に関心を寄せてくださる日本の方々のおかげで、子どもたちはナデジダで保養をする機会を得ることができました。子どもたちは、チェルノブイリ子ども基金のみなさんと、日本のみなさんに「どうもありがとう！」と言っています。

グループの教育担当者  
オリガ・D、アレクサンドラ・K



ベラルーシ 子どもリハビリ・健康回復センター  
「ナデジダ」開設 27 周年

子ども基金は開設当初から「ナデジダ」の運営に協力し、現在もここで保養プロジェクトを開催しています。25 周年の時には子ども基金をはじめ海外 NGO も招かれ記念祭が行われました。

～ チェルノブイリ子ども基金のみなさんへ ～

2021 年 9 月 24 日、子どもセンター「ナデジダ」は 27 周年を迎えました。みなさんは長年にわたり、ナデジダをさまざまな方法で支援を続け、現在もさまざまなプロジェクトに参加しています。

「ナデジダ」の誕生日は、すべての「ナデジダに関わっている人々」、パートナーたち、および友人にとって共通の記念日です。私たちはこのセンターの設立と発展のために、ともに長い道のりを歩んできました、そして今日も「ナデジダ」は子どもにとっても、大人にとっても、かけがえのない場所です。

「ナデジダ」の歴史の 27 年に起きた様々な出来事は、私たちの不屈さ、強さ、活力が試されました。すべての困難にもかかわらず、多くのことが達成され、実行され、共に前進するために、さらなる計画が作られました。「ナデジダ」とチェルノブイリ子ども基金は、2021 年にこれまでと同様に 2 つの共同プロジェクトを実施し、プロジェクト参加者から、そしてみなさんからも高く評価されました。このことは、私たちの決定が正しい方向であったことを示しています。「ナデジダ」



の発展に対する日本のチェルノブイリ子ども基金の貢献は、非常に大きなものであることを強調したいと思います。「ナデジダ」で健康回復のために保養をしたベラルーシの子どもたちを代表し、子どもセンターの発展に対し貢献をしたすべての人々に対し、心からの敬意と感謝の意を表します。それは決して簡単なことではありません。しかしみなさんは、まっすぐな広い道のような、長い支援をしてくれています。

私たちみんなの家、「ナデジダ」の誕生日とともに祝いましょう。みなさんのご健康をお祈り申し上げます。みなさんの人生のあらゆる出来事においてナデジダがそばにありますように！毎日が楽しいこと、良いニュース、エネルギー、そして前向きな気持ちで満たされますように！

子どもリハビリ・健康回復センター「ナデジダ」  
所長 マクシンスキー・V



上：8 月の保養に参加した子どもたちが描いた絵  
「日本のチェルノブイリ子ども基金へ ありがとう」  
ゴメリ市、ゴメリ州の子どもたちより 2021 年 8 月」  
写真：8 月の保養に参加した子どもたち。



## ベラルーシ 甲状腺手術を受けた親と子どもの保養

■場所：子どもリハビリ・健康回復センター  
「ナデジダ（希望）」ミンスク州ビレイカ地区  
■期間：2021 年 7 月 31 日～8 月 13 日（14 日間）  
■参加者：8 家族 23 人：大人 12 人、子ども 11 人（ゴメリ市、レチツァ市、ミンスク市）

参加者のうち 2 人はかつて子ども基金の「里親制度」の支援を受けていました。3 人は子どもの頃に、子ども基金の「甲状腺手術後の子どものための保養プロジェクト」に参加しました（※印）。

参加者たちは到着後の健康診断により、各人の体調に合わせた治療を受けました。心理カウンセラー、小児科医によるテーマ別の勉強会、親子で参加できる陶芸・手芸・絵画教室、スポーツ大会や野外ゲームなどが行われました。自由時間には湖畔で寛ぎ、サイクリング、バレーボール、卓球などのスポーツを楽しみました。これらを通じた交流により参加者はとても仲良くなり、よい雰囲気の中で過ごしました。

### <保養に参加した家族>

★ナターシャ・M（1983 年生まれ）甲状腺手術後、ホルモン剤服用。脊椎の骨軟骨症。娘（12 歳）慢性胃炎、心臓の病気。

「10 代の時に 3 回手術を受けました。手術そのものと将来のことが怖かった。辛い時期もあったが、甲状腺がなくても人生は続きます。ただ、薬と定期検査は必要です」

★エレナ・E（1983 年生まれ）甲状腺手術後、ホルモン剤服用。慢性胃炎。娘（9 歳）は左股関

節の異常、脊柱側弯症。娘（7 歳）。

「手術を受けた時は幼かったので（10 歳・11 歳）、自分の病気を理解していなかった。ただ、手術後の倦怠感、無力感が辛かったです。1 年間は普通に声が出せりましたが、その後回復しました。今は看護師の仕事をして二人の娘を育てています。このような大変な時期にプロジェクトを実施してくださったことに感謝します。日本のみなさんのご健康をお祈りします」

★エフゲーニヤ・I（1985 年生まれ）甲状腺手術後、ホルモン剤服用。慢性腎盂腎炎。胃炎。息子（6 歳）、娘（3 歳）。

「15 歳の時に手術を受けました。放射性ヨウ素治療では病室で一人、1 週間過ごしました。その時は誰にも会えず、医師も衝立の後ろにいたので、恐ろしく感じました。退院後、私は家族を感染させてしまうのではないかと、両親に抱きつくことを恐れました。手術の傷跡をととても恥じて隠していましたが、ナデジダで保養をした時（※）、他の子たちがそれを気にしないで楽しんでいました。それで私も傷跡を隠すのをやめて、将来についてそれほど心配することもやめました。今は 3 人の子どもがいます。日々、健康的な生活を送るよう最大限の努力をしています。そうすれば長く幸せな生活が送れると思っています。新型コロナウイルス感染拡大、福島原発事故に関する問題も抱えている日本のみなさんが、今も私たちを忘れず援助してくださることに深く感謝しています」



★**タチヤナ・B**（1985 年生まれ）甲状腺手術後、ホルモン剤服用。脊椎の骨軟骨症。慢性頭痛。夫（41 歳）は動脈性高血圧症、膝関節の関節症。双子の息子（3 歳）は再発性中耳炎。

「10 歳で手術を受けました。倦怠感、頭痛、気分のむらが起きました。でも自分を一度も病人だと感じず、精神的な辛さはありませんでした。甲状腺の代わりに薬があるから大丈夫、と思っています。人生はその人が望むものになるでしょう。がんは人生が終わりという宣告ではなく、全てが貴重なものであることを学ぶための通過点だったと考えます。今を楽しむようにしています。21 年後に再び、夢の国のようなナデジダを訪れる機会をくださり（※）、ありがとうございます！日本のみなさんの思いやりの心、寛大な魂を感じます。このようなご支援を決して忘れることはありません」

★**イリーナ・K**（1989 年生まれ）甲状腺手術後、ホルモン剤服用。慢性胃炎。脊椎の骨軟骨症。夫（31 歳）胃潰瘍、脊椎の骨軟骨症。娘（6 歳）は気管支喘息、アトピー性皮膚炎、血小板症。

「26 歳で手術を受けました。手術後声が出ない時期がありました。このような素晴らしい保養に参加できて感謝しています。家族全員が良い医療を受け、ゆったりと過ごせました」

★**エレーナ・P**（1984 年生まれ）甲状腺手術後、ホルモン剤服用。慢性副鼻腔炎。夫（37 歳）じや脊椎の骨軟骨症。息子（6 歳）。

「12 歳、13 歳の時、手術を受けました。私は歌

を習っていましたが、手術後は高音が出なくなりました。また傷跡が目立ち、周りの子どもたちにかからわれたのが辛かったです。私は薬を飲みながら健康に気をつけて、普通の人と変わらないように暮らしています。今、私には家族があり、仕事もち、充実した生活を送っています」

★**タチヤナ・S**（1983 年生まれ）甲状腺手術後、ホルモン剤服用。慢性副鼻腔炎。背骨の骨軟骨症。娘（11 歳）は網膜芽細胞腫。障がい児に認定されている。ほかに甲状腺の異常、扁桃腺炎。

「20 歳で手術を受けました。毎朝薬を飲むことに慣れるのが大変でした。手術後、神経の切断による言語障害と口の湾曲が起きましたが、リハビリで回復しました。ナデジダでの素晴らしい保養に感謝します。善良な人々に囲まれ、医療サービスを受けて過ごしました。日本のみなさんのご健康とご多幸をお祈りします」

★**オリガ・P**（1983 年生まれ）甲状腺手術後、ホルモン剤服用。胃十二指腸潰瘍。二人の息子（7 歳と 5 歳）。

「7 歳の時に手術を受けました。一番辛かったのは、両親と離れ離れになったことです。手術後、そして将来自分はどうになってしまうのか、とても不安でした。でも今なら言えます、素晴らしいことはすべて未来にあると。諦めないで、前向きな気持ちでいることが大事だと思います。暗い日々の後には必ず輝く日があります。子ども基金の活動はベラルーシの母親たち、子どもたちにとってかけがえのないものです。みなさんにご家族のご健康、幸福、ご成功を祈ります」





## 参 加 者 へ の ア ン ケ ー ト

### <施設内の設備・環境>

◆滞在した部屋が大変快適だった。◆生活環境が素晴らしかった。◆新鮮な空気、子ども用の広場や遊具がたくさんありよかった。◆施設内の建物が明るい色で塗られていて気分がよかった。

### <食堂の食事>

◆毎回大変美味しかった。◆バランスよく、いろいろなメニューがあり素晴らしかった。◆驚くほどおいしい食事だった！

### <医療サービス>

◆質の高い医療サービスだった。◆医療スタッフの対応が親切で素晴らしかった。◆アロマセラピーは、精神面に良い影響があったと感じる。

### <催し物・クラブ活動>

◆みんなでいろいろな催し物に参加して楽しんだ。◆子どもと一緒に参加したクラブ活動は大変楽しかった。◆陶芸教室が大変楽しかった。

### <あなたの健康状態の変化>

◆気分が落ち着いた。慢性頭痛から解放された。◆精神的な回復とエネルギーの高まりを感じる。◆気分がよかった。背中の痛みがなくなった。◆穏やかで安定した気分になり、体にエネルギー

を蓄えた感じがする◆倦怠感がなくなり、健康状態が良くなったと感じる。心が落ち着き、自分を信じることができるようになった。体の調子もよくなったと感じる。

### <子どもたちの変化>

◆以前より周りの人たちと交流するようになった。◆健康を改善し、体力をつけた。◆落ち着き、心のバランスがとれるようになった。◆活動的になり、よく食べ、よく眠るようになった。

### <「ナデジダ」への要望>

◆雨の日などに、室内でできる催しがもっとあればよかった。◆プールが完成したら素晴らしい。

### <その他>

◆私たちのために素晴らしい休養と健康回復のためのプログラムを用意してくれたチェルノブイリ子ども基金とナデジダに心から感謝します。◆ナデジダではすべてが良く考え抜かれ、滞在する人が快適に過ごせるよう計画されていました。素晴らしい保養をありがとうございます。◆想像以上に素晴らしい保養でした。今まで滞在したことのある他の保養施設とは全く違っていました。このプロジェクトを企画・実行して下さったみなさんのご健康をお祈りします。ありがとうございます。





## 里親のページ

チェルノブイリ子ども基金では 1998 年から甲状腺手術後の子どもたちの『里親制度』を開始しました。現在は、甲状腺以外の腫瘍病、血液病などの子どもも支援の対象になっています。月 50 米ドル相当を 2 年間支援して下さる里親を募集しています。支援期間終了後（2 年後）に再度里子の情報をお伝えし、支援の継続・終了を決めていただきます。これまでに 331 人が支援を受け、現在（2021 年 10 月）は 53 人の子どもが支援を受けています。『里親制度』にご関心のある方は事務局へご連絡ください。詳しい資料をお送りします。

\*\*\*\*\*

★次のベラルーシの子どもたちが里親からの支援を待っています。

**エフゲーニ・D（2011 年生まれ）**

ゴメリ州ドーブルシ地区ジグニ村

ホジキンリンパ腫（リンパ系のがん）

2020 年 12 月に発病。2021 年 5 月に治療を終え、半年に一度検査を受けている。

**マクシム・Z（2008 年生まれ）** ゴメリ市

顎下腺（唾液腺）の腺様のう胞がん。2020 年 3 月に手術。同年 7 月まで治療。3 か月に一度検査を受けている。

**ダリヤ・S（2009 年生まれ）** ゴメリ市

両眼の網膜芽細胞腫。生後 1 か月半で病気が見つかった。2010 年 6 月から 9 月までドイツの病院で治療を受けた。ドイツの慈善団体が渡航費、治療費を支援した。その後は 3 か月に一度検査を受けている。ダリヤの母親（1983 年生まれ）は、20 歳の時に甲状腺がんの手術を受けた。チェルノブイリ事故による障がい者に認定されている。

大変辛い報告です。昨年 1 月より里親支援を受けていた男の子は、白血病の再発のため今年 6 月に小児がんセンターに入院し、治療を受けていました。回復に向かっていた最中、感染症による臓器不全により 8 月 20 日に亡くなりました。9 月には 5 歳になるところでした。

「こんな小さな命なのに、消えてしまうなんて悲しいし悔しい。ご両親にお悔やみ申し上げます。原子力に憤りしかありません」（里親の方より）

★支援を受けている里子の家族からの手紙をご紹介します。



K さんへ

「ご支援と、素晴らしい「ナデジダ」の保養に大変感謝いたします。娘は保養をととても楽しみました。新しい友だちができ、体の調子を整え、多くの楽しい思い出を作ることが

できました。特に気に入ったのは陶芸教室で、粘土でいろいろな作品を作りました。私たちのことを忘れずにいてくださりありがとうございます」

（ゴメリ市 ソフィヤの家族より）



H さんへ

「息子が「ナデジダ」の保養から帰ってきました。保養を計画してくれた方々、またあなたの私たち家族へのご支援に感謝いたします。あなたのような友人の存在をととてもありがたく感じています。私たち

は遠く離れて暮らしていますが、この距離は友情や善良な行いの妨げにはなりません。いつかお会いすることができたらとてもうれしいです」

（ゴメリ市 ミーシャの家族より）

※ミーシャが手にしているのは子ども基金が支援した医薬品です。



## 福島県の甲状腺がん検査の縮小を許すことはできません

福島第1原発事故の被害の「見せない化」が進んでいます。福島県県民健康調査検討委員会は7月26日、今年3月までに260人に甲状腺がんが見つかり、そのうち219人が手術を受けたと公表しました。それにもかかわらずこの委員会で、一部委員から甲状腺検査の縮小が主張されたのです。3月には国会で細野元大臣が検査縮小を主張し、小泉大臣が検討すると答えており、非常に危うい状況です。

福島県は、2016年以降、通常に比べて「数十倍」の甲状腺がん多発を認めつつ、その原因が被曝であるとは「考えにくい」としてきました。福島の子どもの被曝線量は甲状腺がんを発症するほど高くないからというのです。しかし事故後子どもたちがどれくらい被曝したかは、ごく一部の子ども以外調べていません。また県の被曝線量推定では、食物による内部被曝を無視しているのです。それでも原発事故の影響ではないと強弁するために持ちだした理屈が、「将来的に死に結びついたりすることがないがんを多数診断している可能性がある」というものです。甲状腺がんの中には自然に消滅したり、放置していても心配ないものがあり、子ども全員を対象に検査したためにそれらを見つけて手術してしまった、というのです。それが「過剰診断」論です。

しかし福島の多くの手術を執刀した鈴木医師は、既に転移している、あるいはその可能性が高く手術しなければさらにひどくなると判断して手術したと語っています。決して過剰診断ではありません。しかも検査自体は何ら子どもに負担がかかるものではないのに、なぜ検査縮小を主張するのでしょうか。

私たちは改めてチェルノブイリ事故の教訓を想起すべきです。事故から3年後の1989年、ベラルーシ・ゴメリ地方で小児甲状腺がんが増えているとベラルーシ保健大臣が国際原子力機関IAEAに報告しました。その後、小児甲状腺がんが急増し人々の不安が高まる中で、91年にIAEA

国際諮問委員会（委員長重松逸造元放影研理事長）が現地調査を行ったのです。ところが重松氏はろくに調査もせずに「放射線被曝に直接原因があるとみられる健康障害はない」と断定したのです。この結果、早期発見の体制がつくられず多くの子どもたちが手遅れで亡くなったのです。その後、地元の医師の闘いにより、ようやく1995年にIAEAは甲状腺がんのみ放射能の影響と認定しました。しかし白血病、脳腫瘍、小児糖尿病、免疫力低下に伴う病気は一切認めなかったのです。その姿勢は今も変わりません。

事故から35年経つ今も、ベラルーシやウクライナでは事故当時子どもだった大人の甲状腺がんが多発しています（※）。子どもの時に浴びた放射線により傷つけられた遺伝子が、何十年も経てがん細胞を増殖させるのです。だから大人になっても定期的に検査を行ない、早期発見することが大事なのです。福島の子どもたちは今後も5年に一度甲状腺検査を受けることになっています。がんの進行を考えると2年に一度にすべきです。しかしあろうことか、それさもなくそうというのです。このような検査縮小の動きを許してはなりません。

そこで今、福島県「県民健康調査」検討委員会、環境省に対し、福島県甲状腺がん「過剰診断」論撤回・検査拡充を求める署名運動が始まっています。<https://chng.it/x5MbJKs6LB> をご覧ください。（「Change 過剰診断」で検索すると出てきます。）チェルノブイリ子ども基金も賛同団体に加わっています。よろしければ署名にご協力いただければと思います。

小寺隆幸

チェルノブイリ子ども基金 共同代表

※本号7～9頁に掲載の「甲状腺手術を受けた親と子どもの保養」参加者のうち2人（1986年生まれ、89年生まれ）は、それぞれ1986年の原発事故から18年後の20歳、29年後の26歳で甲状腺がんを発症し、手術を受けました。（事務局）

## チェルノブイリの歌声 ～みなさまからのメッセージ～

多くの方々にチェルノブイリの子どもたちへのご支援をいただいております。各地の支援者のみなさまが行っている活動についてご紹介します。

### 第9回チャリティーホームコンサート

我が家では私の誕生日を記念して、チャリティーコンサートを開催しています。いろいろなアマ、プロの演奏家と巡り合い、その都度我が家で開催し、今回で9回目になります。

皆さんからの参加費はチェルノブイリの寄付として少ないですが、寄付させていただいています。従って、演奏者には交通費程度の謝礼しか渡していません。しかし、参加者も演奏者も快く応じていただいています。今までピアノ、バイオリン、マンドリン、チェロなど多くの楽器を聴いていただいています。アメリカ人の若い男性、女性による津軽三味線などで参加していただいたこともありました。

我が家のチャリティーコンサートでは普段は演奏前にお茶、お菓子を提供していますが、今回はネパール人の奥様が参加され、手作りの本場カレーを作ってくださいました。数種類の異なったカレーには演奏者、聴衆ともその美味しさに舌鼓を打ちました。

小さい我が家なので、多くの人に来ていただけませんが、その分温かい雰囲気でのホームコンサートとなっていると思います。今回は8月2日、お昼を挟んで開催しました。地元でお菓子屋さんをしているアマチュアのギターリストの方のトークと演奏を楽しみました。

これからも、チェルノブイリの子どもたちへの支援に皆さんのご協力をえて、チャリティーコンサートが続けていきたいと思っています。

(岐阜県 河内真知子さん)



「平和を語り継ぐ三世代の会」第15回目展示「核のない世界へ」～戦後76年目の夏 子どもたちに青い空を！～ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・チェルノブイリ・フクシマ

8月9日～8月17日、稲城市中央図書館隣接の「体験学習館」で開催しました。今年は『核兵器禁止条約』が発効しましたので、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・チェルノブイリ・フクシマから「非核」を訴える展示を行いました。

福島・楡葉町の宝鏡寺の早川篤雄住職は、2021年3月11日「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」を開設しました。早川住職の「福島原発事故被害を「原爆の火」とともに未来に伝えたい」というメッセージと、チェルノブイリの子どもたちの絵とメッセージ(※)を並べて展示しました。

チェルノブイリの子どもたちの絵はカラフルで、見る人の目を引きました。しかしそのメッセージをよく読むと深刻な状況であることに気づき、「自分たちが体験しているからこそ、福島や日本の子どもたちへのメッセージに、深い意味があることに気付かされました。これは良い企画ですね」と来場者から言っていました。

展示会場に子ども基金のニュースレターとパンフレットを置きましたが、それぞれ持ち帰ってくださった方がいて、心ある方に見ていただけたのだなど、感謝いたしました。

(東京都 宇留賀佳代子さん)



※子ども基金が支援しているベラルーシの慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」の会員の4人の子どもの絵を展示していただきました。(事務局)



■1990年代に始まった精神神経免疫学は、社会的評価が低く進展がなかったが、復活させたいと思います。それは『人新世とは何か』（ポヌイユ他、青土社）に書かれている、世界の片隅に追いやられたネオ・ヒポクラテス学派の信条で「病は気（こころ）から」「その気は気候風土と社会の環境に左右される」というもので、私はこの考えを診療所医師35年の実践で確証しました。新型コロナに対しても、原発事故の放射線に対しても、人は同じ免疫の仕組みで闘います。免疫の仕組みは心と密接に関連して動いています。そのこころは、持って生まれた遺伝子と環境によって左右されます。遺伝子は持っても発現されるのは、多くの環境要因によって左右され、こころが免疫を左右します。こころの働きによって、免疫系は活性化したり、時には過剰に反応し、時には働きを低下させ、病気が生じます。免疫系が低下すると、外来の微生物に対しては感染症にかかるし、体内の異常細胞（がん細胞など）に対しては、がんを発生させてしまいます。過剰に反応すると、外界の抗原、花粉やワクチンに対してはアレルギーを起こし、自分の体内の抗原に対しては、膠原病などの自己免疫疾患を生じます。それが新型コロナの感染症の日本の奇跡（日本人の多くは自然免疫の段階でコロナウイルスを防御しているため他国よりも感染者数が比較的少ない）と呼ばれる実態で、原発事故の被害にも当てはまります。

■放射線の最大の健康被害は、遺伝子を変化させることです。ヒトは約60兆個の細胞を持ち、その大部分が新陳代謝で細胞分裂して新しい細胞をつくり、入れ替わっていきます。体細胞では60億塩基対をもち、生殖細胞では30億塩基対あります。通常は細胞分裂のたびに、10億塩基対に1回くらいの間違い（突然変異）が生じます。放射線、紫外線、化学物質、フリーラジカルなどによって損傷を受け、間違いが増加し、

それを監視機構が働いて壊しています。胎児や子どもに障害が多く発生するのは、細胞分裂が活発だからです。遺伝子自体にも腫瘍遺伝子と抑制遺伝子があり、その能力を発現するかどうかはエピジェネティクスと呼ばれる外部の自然環境、社会環境、内部の心理的要因、情緒や自分の意思などが複雑に関与し、そこには強力な調節システムが存在しています。

■ヒトは同じように放射線を受けても、低線量の場合には、その人の性格や環境などのさまざまな因子によって発現される健康被害が変わります。一世代で100の変異が生ずると言い、突然変異がすべて病的とも言えません。ヒトにある腫瘍遺伝子は、細胞の成長分裂を促進することで傷をきれいに治すのです。まれに余計に細胞分裂を進めてしまうとケロイドになりますが、それでもそこで止まります。遺伝子に書かれた指令を無視し、または指令が欠如して細胞分裂が続くとがんになりますが、そういう細胞は監視機構によって破壊されます。その監視機構の働きが低下したときにがんになります。

■放射線の健康被害の代表にがんがあげられ、確率的に生じると言われています。がんは細胞が変化するので、放射線診断と病理診断で明らかにできますが、他の疾患ではそれができないので、がんが放射線被害を代表させているのです。その確率を左右しているのがこころです。それが精神神経免疫学で明らかになりました。詳しくは私のブログ※をお読み下さい。

■健康被害としては精神心理的被害が大きいのです。母親たちが子どもに対して過剰に心配するとアレルギーや発達障害が増えますし、全年齢で心的外傷後ストレス障害が増えるでしょう。

黒部信一 小児科医師

「未来の福島こども基金」代表、「チェルノブイリ子ども基金」顧問、「沖縄・球美の里」理事  
※ <https://blog.goo.ne.jp/kuroshin1941>

# 2022 年 チェルノブイリ 36 周年救援カレンダー

～ チェルノブイリと福島の子どもたちの救援にご協力をお願いします ～

『2022 年版チェルノブイリ救援カレンダー』が完成しました。保養に参加した子どもたちと、日本の里親から支援を受けている子どもたちの写真で構成されています。カレンダーの収益は、チェルノブイリと福島原発事故により被災した子どもたちの救援金にあてられます。2021 年版の収益は 78 万円でした。場所をとらないコンパクトなサイズです。ご自宅で、職場で、またご友人などへのプレゼントにもぜひご活用ください。ご注文をお待ちしています。



## 【その他の販売品】

◆マトリョーシカのマグネット (写真上)  
マトリョーシカのキーホルダー (写真下)  
各 500 円

◆ベラルーシ製リネクロス  
サイズ 49cm×70cm 800 円

※送料別 (実費)  
子ども基金HPに画像を掲載しています。



- カレンダー 定価 800 円 送料別 (9 部まで 200 円) (10 部以上 : 1 部 700 円/送料無料)
- お申し込み方法 : E-mail、Fax または郵送でお申し込みください。
- お支払方法 : お届けするカレンダーに同封の郵便振替用紙でお振り込みください。
- カラー、サイズ : 縦 30 cm×21 cm (見開き A4 サイズ) ※2021 年版と同様のサイズです。
- 撮影 : チェルノブイリ子ども基金 佐々木真理  
(※2・5・7・8 月の写真 : ベラルーシ子ども健康回復センター「希望」提供)
- デザイン : 川島進デザイン室
- 発行・制作 : チェルノブイリ子ども基金





# 募金・救援状況



## ●募金状況 2021年6月～9月 (単位:円)

|         | 6月        | 7月        | 8月      | 9月        |
|---------|-----------|-----------|---------|-----------|
| 募金件数    | 133       | 94        | 45      | 22        |
| 救援寄付金   | 1,090,420 | 258,160   | 160,330 | 1,565,469 |
| 保養費     | 57,500    | 200,400   | 16,000  | 31,000    |
| 里子支援    | 1,163,570 | 571,800   | 219,820 | 11,930    |
| ニュース購読費 | 52,000    | 41,000    | 16,000  | 10,000    |
| 合 計     | 2,363,490 | 1,071,360 | 412,150 | 1,618,399 |

※9月：生活協同組合パルシステム東京様より「平和カンパ金」1,402,269円をいただきました。

※その他、図書カード、文具などのご寄付をいただきました。

## ♡ 団体名一覧 ♡

(順不同・敬称略)

紙面の都合上個人名は省略させていただきます。ご寄付をいただいたみなさまに心よりお礼を申し上げます。

### 【6月～9月】

ひばりが丘グレイス教会  
プーシェルアキウ  
和らぎヨーガ教室  
さよなら原発東松山の会  
イエスキリスト教会祈りの家  
日本ユーラシア協会  
民宿 夢民村  
生活協同組合パルシステム東京

## ●救援状況 2021年6月～9月 (単位:円)

|                                         |           |
|-----------------------------------------|-----------|
| <ウクライナ>                                 |           |
| ◎チェルノブイリの子どもたちの生存                       |           |
| 里子支援 (半年分×6人)                           | 201,222   |
| 緊急支援 (半年分×3人)                           | 100,611   |
| 病気の子どもたちの保養費                            | 1,408,188 |
| <ベラルーシ>                                 |           |
| ◎困難の中の子どもたちへ希望を                         |           |
| 里子支援 (半年分×44人)                          | 1,475,628 |
| 緊急支援 (半年分×10人)                          | 335,370   |
| ◎子どもリハビリ・健康回復センター「希望」                   |           |
| 「甲状腺手術を受けた親と子どもの保養」<br>追加費用 (参加人数変更のため) | 117,661   |



## みなさまからのメッセージ

◆他者を思い、支え合うことは、人間社会の中で揺るぎのない真理だと考えています。今後とも子ども基金の活躍を祈念します。(大阪府 Sさん) ◆NEWS は頁の終わりまで読みます。私の気持がどなたかと一致してうれしくなります。(秋田県 Sさん) ◆コロナ禍の中、ご苦労が多いと思いますが、みなさまどうぞお大切になさってください。(埼玉県 Tさん)



東京都 増田様より文具、ぬいぐるみ、エコバックなどのご寄付をいただきました。ベラルーシの慈善団体「困難の中の子どもたちへ」の会員の子どもたちへ渡されました。

## ★募金振込口座のご案内★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい方法をご利用ください。※振込用紙以外でお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容のご連絡をお願いいたします。

(1)郵便振替口座 00160-4-98316 口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2)ゆうちょ銀行口座 店番 019 店名 〇一九店(ゼロイチキュー店)

預金種目 当座0098316 受取人名 チェルノブイリコドモキキ

(3)三菱UFJ銀行 支店名(番号):新宿中央支店(469)

口座番号:普通 1688367 口座名:チェルノブイリ子ども基金

# 事務局から

## ■「基金ニュースレター」について

ご寄付をくださった方に、使途の報告としてニュースレターをお送りしています。ニュース購読費(2,000 円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。

※ニュースレターは子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願いいたします。

※ニュース発送経費を節約し、なるべく多くのお金を子どもたちの保養や医薬品に活用したいと思います。そのため長期間、募金・カレンダー購入などのお振り込みがない方へのニュース発送は停止とさせていただきます。事情をご理解いただけましたら幸いです。

## ■ボランティア募集

ニュース発送作業(年3回:2・6・10月):お手伝いいただける方を募集します。次回は、2022年2月中旬の予定です。感染対策のため日程・定員が流動的です。事務局へお問い合わせ下さい。

場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10 階)

※参加ご希望の方は、前日までにメールかお電話でご連絡ください。電話は平日午前10時～午後5時。留守の場合は伝言をお願いします。

## ★編集後記★

ウクライナもベラルーシも新型コロナ感染の収束が見えません。ベラルーシの慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」では、関係者の3人の女性(60代前半)がコロナ感染で亡くなりました。代表のワレンチナさんは言います。「チェルノブイリ事故で故郷を失い、甲状腺がんの娘を支えながら、移住先の村で懸命に生きてきた、そんな苦労した人たちを、コロナは避けてはくれませんでした。今も状況はよくなっておらず、病院は患者であふれています。私たちの団体の多くの

＊＊ ご協力いただいているみなさまへ ＊＊  
振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせと願います。

### すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

### 払込取扱票のお名前・ご住所は楷書で

#### ご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

### 「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で受領確認の連絡をご希望の方に、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

### 「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収証がご入り用の際は振込用紙の該当欄に印をつけてください。

子どもたちも感染しましたが、幸いにもみな軽症でした(10/8に届いた連絡)

昨年、今年とコロナ禍の中でしたが、現地での保養を行うことができました。家族保養の参加者も言っているように、日本中も大変な状況であるのに、チェルノブイリの子どもたちへのご支援をいただいたことに、心よりお礼を申し上げます。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。(事務局)

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行●

住所 〒177-0041 東京都練馬区石神井町3-16-15-408

Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト <http://ccfj.la.coocan.jp/>

◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。

